

【投稿論文】

1970年代の日本における「オカルト」概念の受容と展開 ——「密教ブーム」との関係を中心として——

韓 相允

はじめに——日本における「オカルト」への視座

「オカルト the occult」とは、「隠された知」を意味するラテン語の「occulta」に由来する言葉である。それは現代の研究者により「現象世界の背後に存在する本質と力を、直感的な類推によって把握する公理」などと定義されている¹。この「オカルト」という枠組みに取り入れられる具体的な内容は、語り手によって異なるものであるが、歴史的には「魔術」、「テレパシー」、「未来予知」、「占い」などがその代表として挙げられてきた。日本においては、1970年代が「オカルトブーム」の時代であるとされており²、今日、日本語のタームとして用いられる「オカルト」という言葉も、その文脈で定着したものである。そのプロセスを推進した記念碑的作品が、イギリス作家のコリン・ウィルソン(1931-2013)による『オカルト』(原著1971年)である。1973年に本書の日本語訳が公開されて以来、その題名ともなった「オカルト」は瞬く間に当時の日本に普及した。当時、大人気を博した超能力者のユリ・ゲラーのスプーン曲げ、そしてウィリアム・フリードキン監督の映画『エクソシスト』(日本公開1974年)などの社会的現象も、「オカルトブーム」を構成していくのである。

たしかに「オカルト」という言葉は上記ウィルソンの著作を契機として日本で定着した。だが、本稿が以下に示していくように、無論、その言説枠で再構築されていく様々な事象が1970年代以前の日本でみられなかったわけではない。例えば、「こっくりさん」の流行や「千里眼事件」などの現象に窺えるように、いわ

¹ 一柳廣孝「はしがき」(同編『オカルトの帝国——1970年代の日本を読む』青弓社、2006年)、9頁。

² 例えば、吉田司雄は「一九七〇年代、空前のオカルトブームが日本に訪れた」と述べている(吉田「はしがき」、同編『オカルトの惑星——1980年代、もう一つの世界地図』青弓社、2009年、11頁)。

ゆる神秘的なものへの社会的関心は明治期から存在した³。そしてそれは戦後に至るまで、一貫してみられるものである。しかし、1970年代の段階でそれらが「オカルト」という新しい日本語のタームの下で再編成されていくことは、日本の神秘思想史において一つの転換点であり、現代日本文化の形成を考える上でも大きな意味を有する。かかる問題意識の下で本稿ではその定着の物語を考えていきたい。すなわち、それまではしばしば「科学」・「迷信」・「宗教」などの既存のタームで語られた事象が「オカルト」という包括概念(blanket term)の下で再編成され、交錯する展開に光を当てる。

ヨーロッパの事例に即して、言葉としての「オカルト」を考察する重要性に着目したのは、神秘思想史研究の分野を代表するウォウテル・ハネグラーフである。ハネグラーフは、「オカルト」(そしてときにはそれとほぼ同義で用いられる「エソテリシズム esotericism」)を「ゴミ箱 dustbin⁴」に例え、「宗教」および「科学」のいずれのカテゴリーにも入らない「排除された知 rejected knowledge」と定義した⁵。これは18世紀以降の啓蒙運動の枠組において、「宗教」と「科学」の領域が(再)構築されていくのと同時に、その両方から次第に排除されていく知識体系(占星術や錬金術など)がやがて「オカルト」の領域を形成するに至ったという理解によるものである⁶。この観点から考えると、「オカルト」概念そのものの形成過程を辿る作業は、近代的な認識体系への逆照射を促すという意味があり、それが非西洋の世界においてもいかに言葉として定着していったのかを考えることも、重要な課題であろう。

³ 福来友吉は三船千鶴子、長尾郁子の千里眼能力を支持し、人間の精神能力に関する探求を新しい科学として位置付けようとした。その反面、反対側は千里眼能力について、でっち上げとまでは言えないが、厳密な科学実験によって証明できないため科学とも認められないと主張した。結局、千里眼は迷信への興味を呼び起こす恐れがあるという理由で非難を受け、福来はアカデミズムから失脚した。これを千里眼事件と呼ぶ。詳細は一柳廣孝『くこっくりさん』と千里眼』(講談社、1994年)、165-179頁を参照。

⁴ Wouter J. HANEGRAAFF, *Western Esotericism: A Guide for the Perplexed* (London & New York: Bloomsbury, 2013), p.13.

⁵ 同前、p.1.

⁶ 宗教史学者のオラブ・ハマーはこの捉え方の再検討を唱え、「オカルト」的な領域が常に否定的に考えられてきたのではなく、魅力的なものとして評価され、また、一般知識として受け入れられる場合も多かったと指摘した。そこで、「オカルト」を単なる「排除された知」として定義するのではなく、かかる領域の複雑かつ多様な側面を考慮する必要があると主張した。詳細は Olav HAMMER, “Deconstructing ‘Western esotericism’: on Wouter Hanegraaff’s *Esotericism and the Academy*,” *Religion* 43(2), 2013 を参照。

日本におけるオカルト研究は、特に21世紀以降、著しく進展した。その総合的な成果は例えば、『オカルトの帝国』（一柳廣孝編、2006年）および『オカルトの惑星』（吉田司雄編、2009年）の姉妹論集に代表される。両者は様々な領域に染み込んでいる秘教的な風景としての「オカルト」概念に基づき⁷、それぞれ1970年代と1980年代を中心に、「オカルト」とかかわる様々な文化現象を究明した成果である。しかし、かかる代表的な日本オカルト研究の業績においても、いわゆる「オカルト」として語られる事象の歴史的解明に焦点が当てられており、概念としての「オカルト」が日本に導入される過程への考察は見られない。本稿では、以上の成果も踏まえ、ハネグラーフが述べる「オカルト」という「ゴミ箱」が現代日本でいかに形成されたのかを、考えるものである。つまり、本稿は、言説史のアプローチを試み、日本列島における「オカルト」概念そのものの歴史を辿るべく、いわゆる「オカルト」の枠内で理解される事象ではなく、語られた「オカルト」の歴史的展開に注目していく。

以上の作業に取り組むために、筆者はウィルソン著流行の背景を考えると同時に、それを取り巻くより大きなコンテクストである、1960年代後半から展開しつつあった一種の「密教ブーム」も念頭に置きたい。当時、「密教」はしばしば英語の「occult」の翻訳語として用いられていた。それに応じて真言関係者が「オカルト密教」という言葉を用いながら、「オカルト」との関係や距離のなかで自己を語り直していった現象もみられる。すなわち、「オカルト」と「密教」の思想的交渉過程は研究史上の一問題であると言え、本稿では、その導入として「密教」と「オカルト」が交錯を開始する言説空間に焦点を当て、密教関係者の著作物や雑誌、そしてウィルソンの『オカルト』をめぐる書評など幅広い対象を用いながら、知られざる当時のもうひとつの思想史的な側面を描写したい。

1. コリン・ウィルソン著『オカルト』の日本的受容と「密教」

日本列島における「オカルト」というタームの受容と定着において、コリン・ウィルソン著『オカルト』の翻訳出版が一つのきっかけであったことは先行研究でも言及されてはいる⁸。だが、その受容をめぐる詳細な考察はいまだになされて

⁷ 一柳廣孝は「オカルトは個別的・具体的な現象をともなって日本に広がっていた」と述べ、様々な領域に染み込んでいる秘教的な風景としての「オカルト」を主張した（一柳「はしがき」、同編『オカルトの帝国』、11頁）。

⁸ 金子毅「オカルト・ジャパン・シンドローム」（一柳編『オカルトの帝国』）、19頁、そして住家政芳「宗教書がベストセラーになるとき」（同前）、146頁を参照。

いない。上記の『オカルトの帝国』に寄稿している金子毅は、その概念の受容の様相について、次のように紹介している。

ウィルソンはオカルトを狂信的な妖しげな行為ではなく、また実証されないものは認めないという牢固とした懐疑主義でもない、いわば心を開くことによって統御可能となる新たな科学的論及のステージとして提示を試みているのである。[…] 日本的文脈でオカルトが喧伝されるとき、そこにイメージされるのはウィルソンの言葉とは正反対の、まさに「狂信的な妖し気な行為」としてだろう⁹。

すなわち金子は、ウィルソンが「オカルト」をポジティブなものと理解していたものの、それは日本に受容される際、そのネガティブな側面を連想させる言葉となったという。もちろん、金子のこの指摘は、一部の側面において、正鵠を射ているのは間違いない。しかし、後述のように、当時の日本では公害問題などにより触発された近代批判の声が上がっており、そうしたコンテクストでウィルソンの『オカルト』が「新しい時代の実存哲学」と高く評価されていた。それゆえ、金子が示す「狂信 vs 科学」のような二項対立の中でその受容を捉えるよりは、その両方を取り巻く新しい意味領域の形成として「オカルト」を再検討する方が、得られるものが多かろう。それを念頭において、本章は1973年における『オカルト』翻訳出版の詳細を検討し、初期段階のその受容を考察する。

しかし、その日本的受容を考える前に、ウィルソンとその著書『オカルト』について簡単に紹介したい。1931年にイギリスのレスターに生れたウィルソンは、1956年にデビュー作『アウトサイダー』を発表し、大きな反響を呼んだ¹⁰。しかし、『アウトサイダー』以降の作品は、同レベルの評価を得られなかったため、1959年に彼はしばらくロンドンから離れることを決め、コーンウォールに居を移し、執筆活動を続けていく¹¹。そこで、1971年に発表された『オカルト』は大ヒットし、

⁹ 金子「オカルト・ジャパン・シンドローム」、19頁。

¹⁰ 『アウトサイダー』はニーチェ、ゴッホ、ドストエフスキーなどの人物の精神的な不安を分析した評論集である。ウィルソンが二四歳に発表したこの本は世間から注目を集めてベストセラーとなった (Gary LACHMAN, *Beyond the Robot: The Life and Work of Colin Wilson*, New York: Penguin Random House, 2016), xi。

¹¹ 同前、xi-xvi。

『アウトサイダー』以来の、15年ぶりにベストセラーとなったのである¹²。「本書のテーマは革命的なものである」という言葉で始まる『オカルト』は、神秘的なものに対する読者の認識を転換させようと試みたものである¹³。彼は膨大な事例を挙げつつ「オカルト」の歴史を検討し、それに加えて魔女、錬金術、テレパシー、心霊術など様々な現象を人間が有している潜在能力——彼の表現では「X機能」——の証拠と見なしている。さらにウィルソンは、この能力の開発によって人類は存在の卑小さを自覚し、現代文明から脱することができるかとまで主張している。

ウィルソンが『オカルト』を著した背景として、当時の欧米社会で若者たちを中心に盛り上がっていた神秘主義の流行現象があることは看過できないだろう。のちに「ニューエイジ・ムーブメント」に繋がるこの動きは、近代の物質文明に対するカウンターカルチャーとして強い存在感を発揮していた¹⁴。当時のアメリカ若者の文化を観察・分析した同時代の本 *Religion in the Age of Aquarius* (J・C・クーパー著〔有馬・早川訳〕竹内書店、1972年、原書1971年)を参照すると、当時のユース・カルチャーは既存社会への不信感に基づいて麻薬、占

¹² Colin STANLEY, *Colin Wilson's 'Occult Trilogy': A Guide for Students* (Winchester & Washington: Axis Mundi Books, 2013), p.23. また、ウィルソンの生涯と作品については前掲の Lachman, *Beyond the Robot*に詳しい。

¹³ コリン・ウィルソン著〔中村保男訳〕『オカルト 上』(新潮社、1973年)、16頁。

¹⁴ 「ニューエイジ」を一言で説明するのは難しいが、第二次世界大戦の経験を経た欧米社会は物質を中心とする文化に反発し、失われたはずの本来の精神に戻ろうとする反近代主義的な思想の総体的な名称として使用されている。「ニューエイジ」の先行形態にあたる思想運動の動きは1950年代後半から欧米社会で展開していたが(Olav HAMMER, “New Age Movement,” in Wouter J. HANEGRAAFF, ed., *Dictionary of Gnosis & Western Esotericism*, Leiden & Boston: Brill, 2006, pp. 859)、その用語がマスコミや学界などで広く用いられるようになったのは1980年代以降である(島蘭進『精神世界のゆくえ』、23頁)。本稿で扱っている1970年代の場合、本文でも言及したJ・C・クーパーを含め、同時期の社会学者や宗教学者らは欧米における神秘主義の流行現象を認識しており、Edward TIRYAKIAN, “Toward the Sociology of Esoteric Culture” (*American Journal of Sociology* 78(3), 1972, pp.491-512) や Marcello TRUZZI, “The Occult Revival as Popular Culture” (*The Sociological Quarterly* 13, 1972, pp.16-36)、Mircea ELIADE, *Occultism, Witchcraft, and Cultural Fashions: Essays in Comparative Religions* (Chicago: University of Chicago Press, 1976) などの研究が発表されたが、そのなかで「ニューエイジ New Age」という用語はまだ登場していない。しかし、この時期に欧米社会で起きたオカルティズムの流行現象が「ニューエイジ・ムーブメント」の流れを考える上で欠かせないものであることは間違いないだろう。他に、「ニューエイジ」の特徴と歴史に関する詳細は前掲の Hammer, “New Age Movement” を参照。

い、魔術などの手段を用いた神秘的体験が流行していた¹⁵。こうした状況の中でウィルソンも出版社から依頼を受けて『オカルト』を著述するようになったのである¹⁶。

ウィルソンの『オカルト』は欧米社会において、名詞としての「the occult」が「宗教」とも「科学」とも言えない諸知識を指す包括的な用語として定着するのに重要な役割を果たしたとされているが¹⁷、今まで主張してきたように、日本においても『オカルト』の翻訳出版の意義は大きい。同書は当時の欧米思潮を日本に紹介したのみならず、「オカルト」という新たなカテゴリーを提供し、1970年代における「オカルトブーム」という現象を引き起こした。ウィルソン著の日本語版が刊行された翌1974年に、社会学者の井上俊は次のように、ウィルソン著の日本への影響を評価している。

つい最近まで——たぶんコリン・ウィルソンの『オカルト』がでるまで——私はオカルトという言葉の意味を知らなかった。その方面にくわしい人は笑うかもしれない。しかし大勢としては、むしろ知らないほうが普通だったのではないかと思う。それが今やオカルト・ブームであるという¹⁸。

筑摩書房の総合雑誌『展望』に掲載された上記論説から窺えるように、日本

¹⁵ J・C・クーパー著(有馬知子・早川与志子訳)『密教の復権』(竹内書店、1972年)、vii-xiv頁。

¹⁶ 彼は「オカルト」に好奇心をもって五百冊ほどの本を持っていたものの、執筆の依頼をもらう前にはそのテーマについて真剣に考えていなかったが、依頼を受けて本の執筆を準備しているうちにその重要性を覚えるようになったという(前掲『オカルト』上、28-29頁)。しかし、彼はデビュー作『アウトサイダー』ですでにアルメニア生まれの神秘思想家であるゲオルギイ・グルジエフ(George Ivanovich Gurdjieff, 1866-1877)を扱っている(Lachman, *Beyond the Robot*, p.2)。このことを考えると、「オカルト」に対する彼の関心は、もっと早い段階から彼の世界観とかかわっていた可能性があると思われるが、それについては今後の課題としたい。

¹⁷ Wouter J. HANEGRAAFF, “Occult/Occultism,” in 前掲 *Dictionary of Gnosis & Western Esotericism*, p.888.

¹⁸ 井上俊「オカルト・ブーム考」(『展望』187、1974年7月)、8頁。さて、「その方面に詳しい人は笑うかもしれない」という引用文のエクスキューズについて、少し付言して置きたい。同論説の他の部分において、井上は『日本読書新聞』(1974年4月4日号)掲載の「オカルト文献総合リスト」で言及されている文献の中には昭和時代の小説もあることを指摘し、「オカルト小説の流行」の前にも「怪奇幻想小説ブーム」など類似した流れが存在してきたことを述べている。すなわち、本文の引用文に書いてある井上のエクスキューズは、「オカルト」という言葉は耳慣れないタームであるものの、「オカルト的な」性質を有するものは 誰かが享受してきた日本文化の一部として存在してきたことを間接的に示していると思われる。

における「オカルト」という言葉がウィルソンの著書『オカルト』の翻訳出版をきっかけに広がったという認識は、当時においてもすでに存在したのである。ウィルソン著の発表が日本における神秘的なるものの語り方に転換点をもたらしたもうひとつの証左として、『オカルト』に先んじて、前にも紹介した J・C・クーパーの著書 *Religion in the Age of Aquarius* が挙げられよう。1972年にその日本語版が刊行された当書は、「欧米のオカルティズム」の事象を日本のオーディエンスに総合的に紹介する初期段階のものといわれる¹⁹。この著作の日本語版では、『密教の復権』という題目が掲げられ、本文中にみられる名詞としての「occult」という言葉も、「密教」と翻訳されているのである²⁰。すなわち、1972年の時点では「オカルト」が日本人にとって未だに耳慣れない言葉であったため、*Religion in the Age of Aquarius* の翻訳者は「密教」をその類義語として選んだと、推測できよう²¹。以上のことから、「オカルト」という言葉は、前述のように1973年に導入されたものであり、「オカルトブーム」という認識自体もウィルソンの著作が翻訳出版されて、初めて可能になったと言える。

ただし上記のように、戦後日本における言説としての「オカルト」を考える際に、一時期まで「occult」の翻訳語として「密教」が使用されていたことも、また念頭に置くべきである。つまり、「occult」との接触を介して、日本の土着的な伝統文化のひとつとしても位置付けられる「密教」も、再構成されることになった。換言すれば、日本における「オカルト」の受容は「密教」の再解釈プロセスをもたらしたのである。その具体例は、例えば次のような資料でも確認できる。まず、『オカルト』の翻訳者・中村保男による「訳者あとがき」を見ておこう。

「オカルト」能力、特に「X機能」が、複雑でしかも退屈な文明によって生ずる毒素を処理する自動システムの必要を満たすものとして現代において緊急に必要となっており、魔術や「オカルト」能力は未来社会を築くための「未来の科学」であるというウィルソンの主張は、偶然にも本書とほぼ時を

¹⁹ 酒井角三郎「秘教的なるものの再生と復興」(『朝日ジャーナル』15(42)、1973年10月)、59頁。

²⁰ 例えば、*Religion in the Age of Aquarius* の第一章「The Occult In America Today」が日本語版では「今日のアメリカの密教」と翻訳されている。J. C. COOPER, *Religion in the Age of Aquarius* (Philadelphia: Westminster Press, 1971) および前掲の有馬・早川によるその訳書の目次等を参照。

²¹ これと同様の指摘は、碧海寿広『科学化する仏教』(KADOKAWA、2020年)、222頁にも見られる。

同じくして我が国で刊行された桐山靖雄の『変身の原理』と『密教』の中でも、強く叫ばれている。前者は文一出版、後者の平河出版から刊行されている両者は、全く本書『オカルト』の日本版であるかのような観を呈しており、『オカルト』との同時性と類似は、まさしく暗合と言えるほどである²²。

ここで、翻訳者の中村は当時、阿含宗の前身たる観音慈恵会の指導者だった桐山靖雄(1921-2016)の密教論を言及しつつ、それを「『オカルト』の日本版であるかのような」思想と紹介している。それは「暗合と言えるほど」桐山の密教論とウィルソンの『オカルト』が同時性と類似性を有しているものであるという²³。そして『オカルト』が日本で刊行されて間もなく発表された酒井角三郎による次の書評も確認しよう。

最近、ウィルソンの国イギリスから来たというヒッピーふうの青年が密教こそ現代を救う最高の思想だとためらわず断言するのを聞いて、いまさらながら世界的な思想の潮流を知らされた思いに打たれたことがあった。〔…〕千年のあいだ、日本人の肉体と感受性の奥深くにまで決定的な影響を浸透させながら、近代一〇〇年の表層的論理によって軽視され忘れられてきたこの巨人〔筆者注——空海〕の思想が、いま新しい篤きをもって再発見されつつあるばかりでなく、この年が広く密教的なものの再生と復興の大きな飛躍をもたらしていることには、何かの因縁さえ感じられるのである²⁴。

この酒井の書評は、週刊誌の『朝日ジャーナル』に掲載され、ここでも日本の密教思想と「オカルト」の類似性が指摘されている。酒井はまた、「密教」を世界的な潮流から評価できる優れた日本の思想と位置付ける。このように、「オカルト」はその受容の初期段階において「密教」という土着の思想体系との関係で語られ、それを通して両者は徐々に交錯していくことになる。

興味深いことに、中村保男は『オカルト』を翻訳出版した契機について、「センセーショナルブームを当てこんでのことではなく、それまでに私〔筆者注——中

²² 中村保男「訳者あとがき」(コリン・ウィルソン著〔中村保男訳〕『オカルト』下、新潮社、1973年)、326頁。

²³ 同前、326頁。

²⁴ 酒井「秘教的なるものの再生と復興」、61頁。

村保男]がウィルソンの作品を数多く邦訳し、新潮社がそのうちの数冊を出版してきた実績の延長としてであり、『オカルト』はウィルソンの一著作を日本に紹介するという形で翻訳出版されたのだ²⁵と雑誌『月刊エコノミスト』のオカルト特集記事で述べている。すなわち、予想できなかったブームが『オカルト』を媒介として巻き起こったということである。それは言い換えれば、ウィルソンの『オカルト』が受け入れられやすい環境がすでに当時の日本社会に形成されていたということにもなる²⁶。もちろん、「オカルト」受容の背景は多岐にわたるが、次章では以上で確認した「密教」と「オカルト」の密接な関係に着目し、特に当時の日本における「密教」の様相を詳細に考察する。

2. 「オカルト」前史としての「密教ブーム」

前章では、受容初期段階の「オカルト」という言葉が「密教」との関係で語られていたことを確認した。こうした現象の背景を理解する上で一つの手がかりとなるのが、当時のキーワードとしての「密教ブーム」である。真言宗専門誌である『六大新報』の1973年1月号に「密教ブームを如何にとらえるか」をテーマとする数点の論説が掲載されている²⁷。ここから窺えるように、「オカルトブーム」の直前に、同時代的な認識として「密教ブーム」が展開しており、影響力のある一つの流れとして存在していた。上述のように、当時「密教」がウィルソンの著作と類似性を有しているものとして言及されたことを考えると、「密教ブーム」は日本における「オカルト」概念の受容と定着を考える上で重要な一要素であろう。

さて、ここで指摘しておきたいのは、「密教ブーム」と称されているものの、それにかかわった人物と団体は様々であり、その目的と具体的な活動も複雑な様相を呈していたということである。このことを念頭に置きながら、本章ではその内実を考察すべく、「密教ブーム」を構成したと思われる、当時の三つの代表

²⁵ 中村保男「オカルト思想と人間について」(『月刊エコノミスト』6、1974年)、21頁。

²⁶ 他方、ウィルソンの『オカルト』が世界中に続々と翻訳されるなか、最も早く同書を翻訳出版した国が日本であることも付言して置きたい。『オカルト』の書誌リストには中村訳の日本語版が年度不明となっているが、それが1973年に翻訳出版されたことを考えると、フランス語版とともに最も早く翻訳されたことが分かる(前掲 Stanley, *Colin Wilson's 'Occult Trilogy,'* pp.20-21)。この現象をどう理解するかという問題は今後、さらなる検討が必要であるだろう。

²⁷ 具体的には宮坂有勝「いわゆる『密教ブーム』について」、高田真光「『密教ブームを如何にとらえ、如何に生かすべきか』のテーマをもらったが」、宇喜多元洞「密教ブームに思う」という三つの論説が掲載されている(『六大新報』3040、1973年1月、30-32頁)。

的な動向を取り上げ、その詳細を紹介する。

(a)「密教ブーム」と桐山靖雄

1970年代の「密教ブーム」を考える上で、まず触れるべきは、桐山靖雄の密教論の流行である。桐山は後に阿含宗という密教系新興宗教の開祖となる真言僧であり²⁸、『変身の原理——密教・その持つ秘密神通の力』(文一出版、1971年)、『密教——超能力の秘密』(平河出版、1972年)、『念力——超能力を身につける九つの方法』(徳間書店、1973年)などの著作を発表していた。当時は桐山がまだ阿含宗を設立する前であるが、1972年12月の『高野山時報』に掲載された論説「密教ブーム雑感」を参照すると、密教の実践的な側面に集中した彼の密教論は「オーソドックス」なものではないという真言宗側の認識が見られる。宗教社会学者の西山茂は、「第一の近代化」の一段落期(明治末期から大正期)における「千里眼」ブーム現象が大正期の霊術系新宗教の出現を準備したことと同様に、「第二の近代化」の一段落期(1970年代以降)における「神秘・呪術ブーム」の後にもまた霊術系新宗教の台頭が顕著となり、阿含宗がその一例であると述べている²⁹。このように、桐山の活動は「近代化の一段落期」における「神秘・呪術ブーム」の流行とそれに関わる霊術系新宗教の台頭といった、より広いコンテクストで理解すべきであろうが、詳細は今後の検討課題とし、本稿ではとりあえず、彼の活動は既成教団の活動とは異なる別の流れとして扱う方が妥当であることを指摘して置きたい。

桐山は、「平安仏教のすがたそのままである密教³⁰」の現代日本における復活を標榜し、独自の密教論を展開していった。その際に彼が強調したのが密教の優れた特徴としての超能力(念力)である。桐山は、密教のトレーニングを受ければ自らの潜在能力が開発され、誰もが超能力者になれると主張する。また、彼は密教こそが未来社会にふさわしい「システム」かつ「科学」であると宣言し、それを通じて現代の競争社会を勝ち抜くことができると説いた³¹。超能力は密教の修行を通じて得られるものであるという認識は以前からも存在したが、そ

²⁸ 1973年の時点で桐山は真言宗金剛院派の副管長、大日山金剛華寺の管長を兼任しており、また東京に道場を開いていた(中村「訳者あとがき」前掲『オカルト』下、326頁)。

²⁹ 西山茂「霊術系新宗教の台頭と二つの「近代化」」(『国学院大学日本文化研究所紀要』61、1988年)、85-115頁。

³⁰ 桐山靖雄「あとがき」(同『変身の原理——密教・その持つ秘密神通の力』文一出版、1971年)、456頁。

³¹ 桐山靖雄「序にかえて」(同『変身の原理』)、IV-V頁。

れはあくまで二次的なものと捉えられており、密教の主な特徴として強調されることはなかった³²。しかし、桐山はビジネスマンや学生などに向けて、現代人に必要な自己開発システムとして密教を提示し、超能力を媒介とする密教の大衆化を図った。密教のトレーニングによって一発で運転免許の学科試験を合格した自分の経験をあげ³³、また記憶力が向上する原理を生理学に依拠して詳細に説明するなど³⁴、具体性・科学性を帯びた彼の密教論は人々の耳目を集め、「密教ブーム」の形成に大きな役割を果たした³⁵。

(b) 思想運動の素材としての「密教」の再発見

宗教教団とは異なり、文化・芸術界などで個別的に行われた「密教」再発見の動きも「密教ブーム」の一側面として挙げられよう。例えば、戦後日本の代表的な小説家である司馬遼太郎(1923-1996)がこの時期に空海をテーマとする小説を執筆し、空海のイメージを大衆文化レベルで再表現した。また、ノーベル賞を受賞した物理学者の湯川秀樹(1907-1981)も密教と空海への傾倒を示した³⁶。ここでは思想運動の素材として「密教」を掲げた事例として、前節で触れた『オカルト』の酒井書評でも当時における「密教再発見者の一人³⁷」と言及された梅原正紀(1929-1992)を紹介する。

宗教関係の記者として活動しながら独自の宗教論も展開した梅原は、当時のアングラ運動やヒッピーの出現を「時代の密教化」の予兆と認識し、近代科学に代表される技術文明から人を解放させる革命的な思想として、密教を高く評価した³⁸。この思想の具体的な実践として構想されたのが「公害企業主呪殺祈禱僧団」である。同団体は当時の日本社会を揺るがした水俣病などの公害問題に対応すべく、1970年9月に日蓮宗と真言宗の仏教者八名が結成したものである³⁹。梅原は公害問題を「文明による虐殺」とみなし、公害病の被害者と連

³² 碧海『科学化する仏教』、219-220頁。

³³ 桐山『変身の原理』、30-33頁。

³⁴ 桐山靖雄『密教——超能力の秘密』(平河出版、1972年)、224-258頁を参照。

³⁵ 「密教ブーム」の創出と普及にあたってもっとも大きな影響を与えたのは桐山靖雄であると評価される(対馬路人「密教ブーム」、石川講弘義ほか編『大衆文化事典』弘文堂、765頁)。

³⁶ 宮坂「いわゆる「密教ブーム」について」、30頁。

³⁷ 酒井「秘教的なるものの再生と復興」、61頁。

³⁸ 梅原正紀「時代の密教化の中で」(『理想』463、1971年12月)、10頁。

³⁹ 梅原正紀「呪殺行脚はゆく——公害企業主呪殺祈禱僧団レポート」(『人間として』5、1971年3月)、85頁。

帯する「死者全共闘」を組み、対抗する必要性を主張した⁴⁰。対抗の手段として梅原は密教の經典に基づいた呪殺祈祷を実践しており、これは国家が剥奪した民衆の力を回復する行為と説明した⁴¹。プロの僧侶のみならず、アマチュアで在家の仏教者も中心となったこの運動は、教団側とより密接な関係にある僧侶や仏教学者からも非難を受けたが⁴²、密教を安保闘争以降の新しい革命運動の思想として位置付けた梅原の密教認識は、「密教」再発見の実例として注目に値するだろう。

(c)「密教ブーム」と真言宗

既成教団がいかに「密教ブーム」とかかわっていたのかという問題も、極めて重要な点である。これについて、真言僧で当時、高野山大学教授も務めた仏教学者の宮坂宥勝(1921-2011)の言葉に着目したい。彼は1973年1月において、「密教ブームと呼ばれるものがあるとすれば、それはむしろ現今の宗団とは全く無関係に自然発生的に起こってきたとみる物である」と述べている⁴³。

例えば、同論説によると、1972年10月に放送された『東洋の心——般若心経』というNHK番組には芸術家や評論家が参加しており、宗団所属の者は一人も入っていなかったという。いわば、既成教団としての真言宗は「密教ブーム」の主役であるよりも、むしろ世間で広がっている「密教ブーム」の後を追っていたと考えてよいであろう。実は宗門とは「無関係」な「密教ブーム」が展開していた最中に、真言宗関係の密教学者は宗祖・空海にまつわるような著作を発表していく。『六大新報』で「密教ブーム」が議論される1973年はまさに、空海の生誕1200年記念の年であり、次項の表1から窺えるように、それを契機として開祖を描く多くの著作が刊行された。のみならず、「密教」が複数の方面から叫ばれるなか、真言宗は大正期に刊行された自宗の「安心」を定める全書も再版し⁴⁴、それも高野山からのリアクションとして考えることができる。

表1でもみられるように、司馬遼太郎の連載小説を含め、1973年には空海をテーマとする書籍が急増した。同年、高野山真言宗教学部長として、正統密

⁴⁰ 同前、80-83頁。

⁴¹ 同前、86頁。

⁴² 梅原「時代の密教化の中で」、10頁。

⁴³ 宮坂「いわゆる『密教ブーム』について」、30頁。

⁴⁴ 長谷宝秀(1869-1948)の編集による1914年の『真言宗安心全書』二巻の増補版は1973年に、「弘法大師生誕千二百年記念」事業の一環として刊行される。

表1 弘法大師関係著作リスト(1965-1975)*

年度	タイトル	著者	出版社
1965	『永遠の書像 空海編』	平山観月	有朋堂
1965	『弘法大師の生涯と思想』	大山公淳	大山教授古稀記念出版会
1965-67	『空海』上下	西野寿二著	理論社
1967	『新・弘法大師伝』	宮崎忍勝	大法輪閣
1967	『弘法大師の詩と宗教』	宮崎忍勝	高野山出版社
1968-73	『弘法大師著作全集』全3巻	空海著・勝又俊教編	山喜房仏書林
1970	『弘法大師伝記集覧』	三浦章夫	密教文化研究所
1973-75	「『空海』の風景」	司馬遼太郎	『中央公論』連載
1973-76	『弘法大師真蹟集成』全6巻	佐和隆研・中田勇次郎編	法藏館
1973	『文化史上より見たる弘法大師伝』	守山聖真	国書刊行会
1973	『弘法大師空海：密教と日本人』	和歌森太郎編著	雄渾社
1973	『空海の軌跡』	佐和隆研著	毎日新聞社
1973	『弘法大師空海』	山本智教編	講談社
1973	『弘法大師行状絵巻：東寺本重文』	東寺記念出版委員会編	八宝堂
1974	『弘法大師伝説集』	斎藤昭俊編著	仏教民俗学会
1974	『弘法大師紀行(歴史と文学の旅)』	真鍋俊照著	平凡社
1975	『空海の風景』上下	司馬遼太郎著	中央公論社

* この一覧は国立国会図書館検索サイトの検索データに基づいて作成したものである(最終アクセス2020年9月25日)。なお、このリストは空海のみをテーマとしたものを対象としており、シリーズ物や空海を他の人物とともに取り上げる著作は含まれていない。

教学の最高権威とも言える新居祐政は、その1200年記念に「呼応するかのように「密教ブーム」といわれる風潮が起こり真言密教の再認識の声が満ちている現状である⁴⁵」と述べた。これに加え、同じく真言僧で美術史家の佐和隆研も「近年には密教の再認識の機運がもりあがり、あらためて弘法大師空海への関心が強く喚起されることとなった⁴⁶」と論じる。すなわち、空海の生誕記念事業も、一種の「密教ブーム」の枠組みで展開しているという認識は、同時代の真言宗関係者の間でも、強く窺うことができる。

以上のように、1970年代初頭に日本で叫ばれた「密教」は重なり合いつつも、異なる三方面、つまり新興宗教、思想運動、そして伝統教団という三つのレベルで展開していた。このように「密教」が「密教ブーム」の枠内で多様に再構成されていくなかでウィルソンの『オカルト』が刊行され、前章で確認したように、「密教ブーム」の一部は「オカルト」というある意味での新しい新言説と結び付けられるようになる。要するに、当時「密教ブーム」と呼ばれた雑多な流れの一部は新しく導入された「オカルト」言説と共鳴し、日本における「オカルト」概念の受容と定着において一つの通路として機能したと言えよう。

3. 「オカルト」の拡大と「密教」の動向

すでに指摘したように、ウィルソン著『オカルト』の日本語訳が出版されて以来、「オカルト」という言葉は各種のメディアで頻繁にみられるようになり、翌1974年には「オカルトブーム」というものも指摘されるようになった。

例えば、藤田昌司「出版トピックス 終末的危機感とオカルト・ブーム」(『新刊展望』337、1974年4月)、井上俊「オカルト・ブーム考」(『展望』187、1974年7月)、河村望「科学と呪術——最近のオカルト・ブームについて」(『文化評論』157、1974年8月)、吉田光邦「不安からの超越——オカルトブームの底に秘む現代の危機を探る」(『月刊世界政経』3(9)、1974年9月)、福田純一「オカルト・ブームと戦無派世代」(『月刊アドバタイジング』19(10)、1974年10月)、大谷宗司「オカルト・ブーム——超心理学からみた背景」(『教育心理』22(12)、

⁴⁵ 新居祐政「あとがき」(和歌森太郎編『弘法大師空海——密教と日本人』雄渾社、1973年)、35頁。

⁴⁶ 佐和隆研『空海の軌跡』(毎日新聞社、1973年)、43頁。

1974年12月)など、多くの論説や記事が当時の総合雑誌に発表されていることから分かるように、それは同時代的な認識としても強く存在した。

言葉としての「オカルト」の流行現象を示すもう一つの例として、大陸書房の出版リストを参照しよう。大陸書房は専門の出版社として1967年設立され、1970年代の「オカルト・ブーム」を支えたと先学に評価される⁴⁷。次項の表2で、大陸書房が1973年から翌年にかけて刊行した翻訳書のリストを確認できる。ここから窺えるように、1973年まで書名に一度も表れることがなかった「オカルト」という言葉は、1974年以降の翻訳書のタイトルに多数登場しており、これもこのタームの流行現象を表している。続いて、どの内容の本が「オカルト」と題されていたのか確認するため、日本語訳に際して「オカルト」という言葉をタイトルに掲げるようになった著作の原文情報をみると次の通りである。

表3で確認できるように、原著の題名に「occult」というタームが出ているのは、ダル・リー(本名 Adalbert Nebel, 1895-1973)の *Understanding the Occult*のみであり、その他は魔術や未来予知など多様な内容が、「オカルト」という名の下に翻訳され、集約されている。以上のように、1974年以降の流行は多くの観点から確認できるが、当時の「オカルトブーム」関連記事から、「オカルト」という言葉の下で集約されていた内容もわかる。

例えば、『出版ニュース』1974年2月号に収録されている「オカルト・超能力の本——たかまる非合理・神秘への関心」では、超自然的な現象とかかわるようなすべての著作——ゴシックや SF 小説を含め、怪獣・超能力・催眠術・四次元・UFO・占い・ヨーガなどをテーマとするもの——が「オカルト」関連の書籍として紹介されている⁴⁸。すなわち、以前には異なるジャンルとして認識されていた様々な内容が、この時期になって初めて「オカルト」というブランケット・タームで括られるようになったのである。このことは日本におけるオカルト史を考える上で、極めて重要な点であろう。

⁴⁷ 飯倉義之「美しい地球の(秘境)——〈オカルト〉の揺籃としての一九六〇年代〈秘境ブーム〉」(吉田編『オカルトの惑星』、28頁。

⁴⁸ 山下武「オカルト・超能力の本 たかまる非合理・神秘への関心」(『出版ニュース』、1974年2月)を参照。

表2 大陸書房の翻訳書出版目録(1973-74)*

1973年			1974年		
タイトル	著者	訳者	タイトル	著者	訳者
『未知なる惑星』	ピーター・コロシモ	坂斉新治	『超心理学入門』	マッソン・イナルディ	坂斉新治
『宇宙人の痕跡』	ピーター・コロシモ	竹山博英	『オカルト物語』	ジェラルド・カーシュ	中隅佑子
『怪獣の謎』	ダニエル・コーエン	小泉源太郎	『オカルト大予言』	スチュワート・ロップ	小泉源太郎
『ネス湖の怪獣』	ティム・デインズデール	南山宏	『オカルトの世界』	レオ・ダラモンティ	相沢健司
『四次元から来た怪獣』	ジョン・A.キール	南山宏	『オカルトの秘密』	ダニエル・コーエン	柴田忠
『不思議な出来事』	エミール・シューマツヒャー	中隅佑子	『先史への宇宙船』	ピーター・コロシモ	川名公平
『世界の幽霊』	スージー・スミス	蜂谷敬	『幻想大陸』	L.スプレーグ・ド・キャンブ	小泉源太郎
『星を射る人』	ピーター・コロシモ	花野秀男	『魔術師ヒトラー』	J.H.ブレナン	小泉源太郎
『古代王墓の秘密』	ダニエル・コーエン	小泉源太郎	『ファラオの呪い』	フィリップ・バンデンベルグ	原一男
『ムー文明の発掘』	トニー・アール	小泉源太郎	『太陽の息子たち』	マルセル・F.オメ	小川伸
『時のない地球』	ピーター・コロシモ	坂斉新治	『死後の生命』	ハンズ・ホルツァー	和巻耿介
『地底文明説』	エリック・ノーマン	小泉源太郎	『宇宙の知的存在』	ジャック・バルジエ	小泉源太郎
『地球空洞説』	レイモンド・W.バーナード	小泉源太郎	『実録エクソシズム』	ダニエル・ローガン	大門清
『ポリネシアの鳥文明』	ロバート・C.サッグス	早津敏彦・服部研二	『オカルト入門』	ダル・リー	日夏響
『神秘の人』	コナン・ドイル	小泉純	『UFO 追跡』	ロベール・フレデリック	牧原宏郎
『古代竜と円盤人』	F.W. ホリデイ	和巻耿介	『仮説宇宙文明』	プリンスリー・トレンチ	小泉源太郎
			『古代アラビアの廃墟』	ガブリエル・マンデル	坂斉新治
			『動物の謎』	オズモンド・ブレランド	日夏響
			『図説・海の怪獣』	ジェイムス・B.スィーニ	日夏響
			『オカルトの魔術』	クリスチナ・ホール	和巻耿介

* この大陸書房関連図書のリストは、ウェブサイト「ameqlist 翻訳作品集成」の内容を参考に作成した(<https://ameqlist.com/Ota/tairiku/hard.htm>、最終アクセス2020年9月25日)。なお、ここで一つ指摘して置きたいのは、1974年に大陸書房で出版されたいくつかの翻訳書は当時の流行語である「オカルト」をそのタイトルに用いているのに対し、同年に刊行された日本語原著の書籍はテレパシー、超能力などの素材を扱っていても「オカルト」をそのタイトルに掲げていないことである。この点については今後の課題としたい。

表 3 「オカルト」をタイトルに掲げる大陸書房刊行の翻訳書(1974年)

タイトル	原文タイトル	著者	訳者	原著発行年
『オカルトの魔術』	<i>Witchcraft in England</i>	Christina Hole	和巻耿介	1945
『オカルト物語』	<i>On an Odd Note</i>	Gerald Kersh	中隅佑子	1958
『オカルト大予言』	<i>Strange Prophecies that Came True</i>	Stewart Robb	小泉源太郎	1967
『オカルト入門』	<i>Understanding the Occult</i>	Dal Lee	日夏響	1969
『オカルトの世界』	<i>Universo Proibito</i>	Leo Talamonti	相沢健司	1972
『オカルトの秘密』	<i>The Magic Art of Foreseeing the Future</i>	Daniel Cohen	柴田忠	1973

以上のような、新しい語りの枠組みとしての「オカルト」が登場すると、「密教」も本格的にその枠内で語られるようになる。その具体例を先に触れた記事「オカルト・超能力の本」からまた確認できる。ウィルソン著の訳者である中村保男自身も桐山靖雄の作品を「オカルト」として論じたことはすでに述べた通りであるが、それに加え、同記事の筆者である文芸評論家の山下武(1926-2009)も当時の新刊を紹介する際、真言僧である松長有慶の『密教の相承者』、稲垣足穂・梅原正紀の『終末期の密教』、そして歌川大雅の『密教秘法』を下記の引用文のように挙げている。

末広千幸『続・超能力入門』(大陸書房)、橋本健『四次元の世界』(潮文社)、鈴江淳也『日本の四次元』(大陸書房)、キール『四次元から来た怪獣』(南山宏訳＝同上)、藤沢偉作『超自然学入門』(同上)、市村俊彦『逆説の世界』(同上)、コロシモ『星を射る人』(花野秀男訳＝同上)、同『宇宙人の痕跡——謎の世界の研究』(竹山博英＝同上)、黒沼健『空飛ぶ円盤と宇宙人』(高文社)、ホリディ『古代竜と円盤人』(和巻耿介訳＝大陸書房)、シューマツヒャ『不思議な出来事』(中隅佑子訳＝同上)、黒田正典『第六感学入門』(協同出版)、木下美智子『五分間靈感体操』(徳間書店)、ヒルガ

ード『催眠感応性』(齊藤稔正訳=誠信書房)、世和玄次『How To プロ催眠術師』(日本文芸社)、リード『念力の前跡』(中原周作訳=実務教育出版)、桐山靖雄『念力』(徳間書店)、松長有慶『密教の相承者——その行動思想』(評論社)、稲垣足穂・梅原正紀『終末期の密教』(産報)、歌川大雅『密教秘法』(桃源社)、飯島貫美『仏教ヨーガ入門』(日貿出版社)、関口野蕃蔵『ヨガ行法中伝』(霰ヶ関書房)、伊藤安志『ヨーガに見る東洋人の叡智』(土屋書店)…⁴⁹。

上記の引用文から、「密教ブーム」の名で括られていた多様な密教書がこの時期から「オカルト」というジャンルの中で理解されるようになっていったことが分かる。このように、「オカルト」という言葉はコリン・ウィルソンの『オカルト』を通じて日本に紹介されて以来、メディアで活発に語られながら日本の土着思想とされる密教までを含む包括的な概念として定着していったと言えよう。

おわりに

以上、本稿では西洋から新しく導入された「オカルト」という言葉の翻訳語として日本の伝統的な秘教思想とされる「密教」が使われたことに注目し、両者の錯綜現象について考察を行った。この作業を通し、日本における「オカルト」概念の導入は一方向的な受容ではなく、既存の思想・文化との交渉を伴うものであったことを明らかにした。

本稿で考察したように、コリン・ウィルソンの『オカルト』が日本に翻訳出版されたことを機に「オカルト」という言葉は日本で本格的に使われ始めた。一方、日本でもそれ以前から近代に対する問題意識に基づき、神秘的なものへの関心が高まっており、そうしたコンテクストの中で「密教ブーム」と呼ばれる現象が展開していた。神秘的な力による物質世界の超越を目指した二つの思潮(戦後における欧米の神秘思想と日本の「密教ブーム」)には共通点が見られ、「密教」は『オカルト』の翻訳出版に際して西洋の思想的な潮流に遅れない東洋(日本)の秘教思想として高く評価される。言い換えれば、日本における「オカルト」概念は同時代の「密教」認識を一つの通路として受容されたと言えよう。それ以来、「密教」は宗教でありながらも様々な記事で「オカルト」の一種として紹介され、「オカルト」は「密教」と交差しながら定着するようになる。

⁴⁹ 山下「オカルト・超能力の本」、9頁。下線は引用者による。

さて、本文では西洋から来た「オカルト」概念と、日本にすでに展開していた「密教ブーム」のコンテキストが接続し、「密教」が徐々に「オカルト」の一種として包摂されて行く過程を究明した。実は、その再構築の過程は双方向的なものであり、「密教」もまた「オカルト」との関係から自宗を語り直そうとした。その具体例として、雑誌『エコノミスト』（毎日新聞社、1974年）収録の「特集 オカルトと科学と宗教」も参考にできよう。この特集には前にも触れた『オカルト』の翻訳者・中村および高野山大学教授の宮坂を含め、画家・前田常作（1926-2007）、社会学者・森岡清美（1923-）などが寄稿しているが、「オカルト」関連の特集に密教をテーマとする宮坂の「現代における密教の復権——呪術と奇跡のないものは宗教ではない」が含まれていることは注目に値する。ここで宮坂は「オカルト」について「近代的な合理主義が生み出した現代文明の病弊を、突破しようとする試みのなかに位置付けることもできよう」と評価した上で、「密教のなかにも多分にオカルト的な要素があるにはある」と述べ、今日の「オカルトブーム」と共に「密教も再発見されようとしている」と主張した⁵⁰。つまり、宮坂は「オカルト」の枠組みを参照しながら「密教」を現代にふさわしい宗教として再評価しようとしたのである。このことから、お互いに影響を与えながら再構築されていく「密教」と「オカルト」の様相を確認することができる。一方、「はじめに」でも述べたように、1975年に至ると、「オカルト」を否定的な意味で使いながら、それとの距離のなかで自宗を語り直そうとする現象もみられる。その歴史的な展開については今後の課題にしたい。

本稿は戦後において西洋から発信された神秘思想の潮流と、日本国内で展開してきた土着的な神秘思想の交渉の一側面を、「オカルト」及び「密教」という言葉の錯綜現象を介して分析した。ただし、密教は具体的・歴史的な実体を有しているものであり、密教以外に「オカルト的な」性質を有しながら展開してきた様々な思想的な実践の流れも日本における「オカルト」概念の受容を考える上で重要なコンテキストであると思われるが、本稿では検討できなかった。この点に関しては今後さらなる検討を通じて補足していきたい。

⁵⁰ 宮坂宥勝「現代における密教の復権——呪術と奇跡のないものは宗教ではない」（『月刊エコノミスト』6、1974年）、49-53頁。

【欧文要旨】

The Reception and Development of the Concept of ‘the Occult’ in 1970s Japan: On the ‘Mikkyō Boom’ and its Influence

HAN Sang-yun

Colin Wilson’s *The Occult* (1971), produced in the cultural context of the revival of occultism in Western society, was translated into Japanese in 1973. After its introduction to Japan, the term “Okaruto” became a true buzzword, and a cultural phenomenon dubbed by contemporary media as “Occult Boom” took place. However, this was not the beginning of Japanese people’s interest in things with alleged “magical characteristics.” Even before the introduction of this term, dissatisfaction with the problems brought by a so-called “materialistic society” was already pushing people toward an interest in the supernatural. One example of this trend is the “Mikkyō Boom,” an umbrella term used by contemporary media to refer to different movements that attempted to reinterpret and adapt Japanese esoteric Buddhism. When the Japanese translation of *The Occult* appeared, Mikkyō was almost immediately acknowledged as the “Oriental version” of the Western ideas presented in Wilson’s work. From this moment on, Mikkyō, which thus far had been understood as a religion, also became heavily associated with the “Occult.” With the above in mind, this article examines the negotiation process between the Western notion of “the Occult” and Japanese traditional religious thought, i.e. Mikkyō. In short, in this article I clarify how the reception of “the Occult” was influenced by the contemporary context of the “Mikkyō Boom.”

【キーワード】 オカルト、密教ブーム、コリン・ウィルソン、桐山靖雄、梅原正紀